

開墾地土壤の研究特に腐植質 火山灰土壤に就いて

農林省農事試験場九州支場 出井嘉光

中南部九州一帯には「黒ボク」と呼ばれる輕鬆な腐植質火山灰土壤が廣く分布してゐる故、必然此の度の開墾事業にも、此の種土壤が問題化してゐる。然るに此種土壤は顯著な特性を有つてゐる故、それを究明すると共に開墾後に於ける變化を知らんとして次の如き研究を行つた。

採取土壤は熊本、宮崎兩縣下に於ける腐植質火山灰土壤の開墾地に於いて未墾地と、その近傍の既墾地（熟畑）土壤を夫々上下兩層採取した。

酸度は相當強く、PHは4.8前後で、置換酸度は低く加水酸度は著しく高い。未墾地は熟畑より、表層土は下層土より酸度が強い。鹽基飽和度は何れも低く特に未墾地表層土に於いて著しい。

吸收係数は窒素、燐酸共に高く沖積土の數倍の値を示した。

腐植の含量は頗る大で、14~17%を含有する。未墾地は既墾地より多く、表層土は下層土より高い。C:N率も一般に高く、特に未墾地及表層土が高い。

乾土効果は未墾地は既墾地に比較して數倍高く、窒素より觀ると肥沃であるが開墾後の年數と共に減少する。

石灰効果をアンモニヤ化成率より觀ると、この種土壤は頗る低い。即ち沖積土壤の約十分の一相當量が生成するのみであり此の點に關し、今後も研究せねばならぬ。

燒土處理は多量のアンモニヤ態窒素を化成するが、未墾地表層土に於いて特に著しい。